

# 解題と翻刻 中庄新川家蔵 古今和歌集聞書（仮題）

小 高 道 子

\*キーワード

古今和歌集・古今伝受・肖柏・和歌文学・秘伝・講釈

## 【解題】

本書は、中庄新川家に所蔵される二紙で、整理番号は一七一一五〇―一（二）。寸法は両紙ともに二五・五糎×三四・五糎。外題・内題など内容を示す記述はない。折紙にして記入しているが、右端上部に細字で「二二」と漢数字が付されている。一紙目が和歌（『古今和歌集』十六）の注の途中で終わっているのに対して、二紙目は最後に空白が残る。付された漢数字とあわせて、この二紙で一つの纏まりがあると推定される。

内容は、『古今和歌集』春上部の七―二十七首目までの注を記す。詞書と作者、そして和歌の一部を引用した後で、その和歌についての解説を付す。余白や行間に書き入れが見られ、また、見せ消ちや、補入、さらに字の上から重ねて書いて訂正するなど、書写に際しての訂正が多い。さらに、例えば十八首の和歌・注では、和歌でも注でも「野守」を「の森」と記すなど、同音異義語の漢字の誤りも見られることから、書物を目で見て書写したと言うよりはむしろ、耳から聞いた内容を筆記したものと推測される。二十首の注釈を記した二紙でまともになっていることとあわせて、

『古今和歌集』の講釈聞書と推定できよう。『古今和歌集』卷一の講釈は、「古今和歌集」という「題号」および「春部」の説明から始まるので、あるいは、『古今和歌集』春部の二回目の講釈かもしれない。

内容は、『古今和歌集』の講釈聞書であるが、講釈内容は宗祇の流れを継承した他の聞書とは大きく異なっている。同時代に三条西家に伝えられた細川幽斎の聞書『伝心抄』と異なるばかりでなく、肖柏から宗祇に伝えられた『古今和歌集聞書』（『古聞』）とも異なっている。堺伝受として相伝を繰り返す中で、講釈内容も変化したのであろう。宗祇から三条西実隆と肖柏に相伝された古今伝受は、それぞれ三条西家の古今伝受・堺伝受として、それぞれ継承されていたとされるが、連歌師に伝えられた講釈聞書の内容は、肖柏の門弟宗祇の聞書以外には知られていなかった。その、堺伝受において継承された講釈の内容を伝える資料として極めて貴重な資料であるといえよう。

新川家には、肖柏を祖とする古今伝受の系図も伝わる。いわゆる堺伝受であるが、堺伝受については、これまでは、その実態を伝える資料は

紹介されてこなかった。肖柏から続く系図と、一部とはいえ講釈聞書が伝わる（これらについては、次回の調査研究報告にて報告を予定している）ことから、堺伝受が確実に継承されていたことを窺わせる資料として注目される。全文を翻刻する所以である。なお、聞書の内容については、稿を改めて検討したい。

なお、本稿は、中庄新川家文書研究会における共同研究（担当 山村規子）の成果をもとに小高が翻刻を整理・校訂し、解題を執筆したものである。貴重な資料の閲覧・公開を御許可下さった新川家に深謝申し上げる。

## 凡例

一 原文に忠実に翻刻するため、漢字仮名の別、濁点は、底本のままとした。  
一 字体は通用の字体に改めた。ただし、一部、もとの字体を残した所がある。

一 原則として、カタカナはひらがなに改めた。ただし、読みやすさを考慮して、注釈の部分で用いられたカタカナなど、一部、カタカナを残した。また、私に読点を付した。

一 書物を書写した、というよりはむしろ耳から聞いた内容を筆記したと推定されることから、見せ消し、補入などは、訂正後の本文に従った。

一 改行・空白・書入れなど、文字の位置は、『古今和歌集』本文以外は継承せず、改行箇所／を付すことにより示した。ただし、明らかに異なる内容の注を改行して記してある時など、一部、改行を残した。ま

た和歌の一部に続けて注を記した箇所には、和歌と注の間で改行を加えた。

一 左側の書入れは、該当部分の下に（ ）に入れて記した。

一 原本には「○」を付して注記した部分がある。「○」はそのまま翻刻した。

一 『古今和歌集』の和歌には国歌大観番号を記した。

一 原本は、和歌を二行で記しているが、和歌の一部が省略されている時は、その部分を国歌大観により（ ）に入れて補った。この時、改行は省略した。

## 【翻刻】

### （第一紙）

7 心さしふかくそめてしおりければ

きえあへぬ雪の花とミゆらん

折と居にかけて云説あり、枝を折と／心を染て居る、定家ハ折と也、  
／そめて也、シハ助字也、

定家の折にてハ、下かすまぬ枝を折て／初て雪とミたとハすまぬ也、  
古来の説よし、

きへおふせぬ、きへやらぬと云也、手て取て花と／まかふ事なし、折  
ぬうちのそんた／所ノサマ也、

藤原良房、忠仁公也、まうちきミといふ

8 春の日の光にあたる我なれと（かしらの雪となるぞわびしき）

二条后ハ東宮か御たん生故、東宮の御息所ト云也、／親中納言なれ、其娘中——ノ息所といふことし、

文屋康秀也、

春日ハ東宮の事をさす也、光にあたるハ／恩ヲカウムル也、雪のかしらにかゝるを、我／かしらの白髪にいふ、老行ヲ云て／ユえ也、昇殿せぬ人故、庭上ニ居る／かしらへ雪のふる也、久しく恩光に／預る事なきをわふる也、心にせんかたなきを／わぶると云、親にはなれ子にはなれて、／しかたなきをわひんと云ことし、

貫之

9 霞たちこのめも春の雪ふれハ（花なきさとも花ぞちりける）

木の目もはると春とかねたる也、草木／春ニなれハ目を張たすゆへ、張といふ也、／弓を張るといふ心也、

此哥もしや天子ノ恵のいたらさる所／なき心ニや、

藤原言直

10 はるやとき花やおそきと聞わかん（鶯だにもなかずもあるかな）

や、ウタカヒ字也、ときハとく来たのか、花の／遅キノカ、鶯に聞たらシレル、鶯さへも／鳴カヌ也、だにもなりとも也、爰ハさへも也、

○鶯の初音をもらせ春やとき花やをそきと／思ひ定めん

壬生忠峯<sup>（つむぎ）</sup>

和泉大掾の／隨身、祖父も／しらぬ人也

11 春來ぬと（人はいへどもうぐひすのなかぬかぎりはあらじと思ふ）

四条大納言、哥の品を定て中ノ中ニ至たる／哥也、

なかぬ——ハあひた也、あ——と思ふハ、／そうハあらじと思ふ也、

源まさすみ

寛平ハ五十九代宇田ノ天皇の／在御号

照宣公娘

きさいハ后也、きさきのきをひくと／いの字出る也、きさいといふ、お、ん時ハ／天子ノ時也、大御時とかく也、

12 谷風にとくる氷の（ひまごとにうちいづる浪や春のはつ花）

谷風ハ先東風也、詩経にもありけれども／爰てハ谷風に吹くる風也、ひまハ氷のひま、間也、

浪やノやハ、かた疑といふ也、春の初花／ならんといふ心を、ならんといわす聞ス也、／ひしも一つ、伝事也

紀友則 父ハ宮内少友と云説あり、／さたかならず、撰

者也、／古今撰果ぬうち、死と見へて、紀／貫之ノ哥々哀傷にあり、是にも／跡て入し也、

13 花のかを（風のたよりにたぐへてぞ鶯さそふるべにはやる）

たくへてといふ、添へる也、副、事ニ／タクエル也、／ソヘル也、  
花の香を風のさそふハ常に惜ケレトモ／鶯の為ニハかまハす、

大江千里／僧者也

14 鶯の谷より出る（こゑなくは春くすることをたれかしらまし）

幽谷より出て喬木ニウツル也、

鶯なくとも春を知る事ハ、外ニも／アレトモ、鶯主なる故、シカト云、

在原棟梁 みねやな

15 春たてと（花もにほはぬ山ざとはものうかるねに鶯ぞなく）

物うかるねとハ、物ノウキ声ニ鳴と云心也、／鶯に質してヨム、物  
うくある音に也、貫之か

○花鳥の色をも音をもいたつらに物う／かるとすすすのミ也

よみ人しらす

16 のへちかく（いへゐしせればうぐひすのなくなるこゑはあさなあさな  
きく）

奈良の末ノ哥ならん、

朝なく／アサナサナとヨム也、日ことにと／云位ノ／事也、

別て此哥事弘き、面白しと也、

17 春日野ハ（けふはなやきそわか草のつまもこもれり我もこもれり）

春日野ニて野遊ニヨミシ也、やくなハ野を／ヤケバ興ナキ故ヤクナ  
也／なやきソ、けふハヤク事ナカレ、勿<sup>ナ</sup>燒<sup>キ</sup> 上は、／ヲサヘル也、  
／ナト云へハ、ソト云ウハツ也、若草ハ故より夫婦ニ比シテ／よむ、  
妻ハもの、端也、若草も古草モト云也、  
ハツレ也

（第二紙）

二

春日の、伊勢もの語、是を武蔵野といふ／有、古今誠、伊せハウソ也、  
作り物語ゆへ、哥も作りしもの也

18 かすかの、とふ火の森（いでて見よ今いくかありてわかなつみてむ）

とふ火の森、春日野ニアリ、和同年、初而春日野ニ／烽火成山を置  
れし事有、

今いくか有てといふをいわんと也、上を／いふたる也／つみてんとハ  
つまふぞ也、

須磨淡路の間ニも船を呼飛火あり／

○秋輔の哥に、いかにせんしるしも今ハ／たゝわひぬ声も通ハぬ淡路島山  
若菜ハ正月七日始めていつまでも春の／うちにつむをいふ也、七草に  
かきらす、

19 み山ニハ（松の雪だにきえなくに宮こはのべのわかなつみけり）

此ハハ、わくるてにはといふ也、是ハ是／とわける心也、きえぬにを

のべんと、きへなくト云也、

枕詞也、弓にする木ノ良木也、

20 梓弓おして（はるさめけふふりぬあすさへふらばわかなつみてむ）

弦かけるハ張也、おすハかける時おして／張と云説、古世の事也、  
古来おし弓ハ／はる也、是ハ秀句也 あつさ弓おし／さへて春雨ふ  
る也、梓弓春雨と云也、

さへハものを添てそ也、あすへ降らハ／ハに草花そへまし、つまんと  
也、

俊成卿歟

隆家

○梓弓春の日くらし引つれて入るさの

山にまどひをぞする

あまり秀句多きハあし、と也、／古今ハよし、

仁和の帝 カウ后天神也、百人首ニ有／にん明の第二番  
めの御子也、五十二歳位ニ即

21 君かため（春ののいにてわかなつむわが衣手に雪はふりつつ）

君後世天神一人ニ限る故シンシヤクスベシト云、／ラチモナキ事也、  
是にてしるへし／親王か人ニ／給ふニ君とあり、

天子被下ヲマシ君といふ事証哥あり、

我ハ何となく自身わか事にいふ、

雪ふりて寒けれと君かために若菜を／つミしと也、

哥たてまつれと 貫之

22 春日の、若菜（つみにや白妙の袖ふりはへて人のゆくらむ）

貫之京に有て春日野思ひやりたる也、／ふりはへハうちはへと同じ、  
袖をつらねてと同じ／はへるハ延の字も書、袖をうちつらねて也、／  
白妙ハ古ハ梶で織し布をいふ、梶を／たへといふ故、

貫之春日野故にひかしの京にても思ひ／やつてよめる也、心も高く  
甚やさしき哥也、

題しらす 行平 古代の朝事

23 春のきる（かすみの衣ぬきをうすみ山風にこそみだるべらなれ）

春ニ体ノ有モノトミたて、よむ也、うすミ衣の／たてぬきのうちのう  
すきを云、うすミ間ミの／てには、うすふしてト云心也、

こそも在中より取出して云もの也、是こそ我／みなれといふ二同じ  
乱るへら、嵐に衣のなえよる事也、まよひとも／いふ同じ事也、へ  
ら也トハ古今始めてヨム、後少々／アレトモ、万ニハなき事也、べきな  
れ也、へらともべしとも／へきとも也、

源宗行

24 常盤なる（松のみどりも春くれば今ひとしほの色まさりけり）

常盤也、コイノ多キ也、常ニ常に／不変ニかわらぬ岩也、常盤にあ  
トコイハ

る所の松／の緑也、葉の春ヲ緑といふ、松の若葉ニハ／あらず、と  
きハにて色のかわらぬ松也、

貫之

25  
我せこか衣はるさめふることに（のべのみどりぞいろまさりける）  
セコハ夫をさして云、夫婦にも何にも通ス、神代記／女ノ事ヲ我な  
セのと云、親類朋友ニもヨム也、／是ハ貫之女ニかわりて／よミシ也、  
背妹也、夫をさす也、

26  
青柳のいとより（かくる春しもぞみだれて花のほころびにける）  
古来よりやきと云、春しもぞ、春ぞ也、

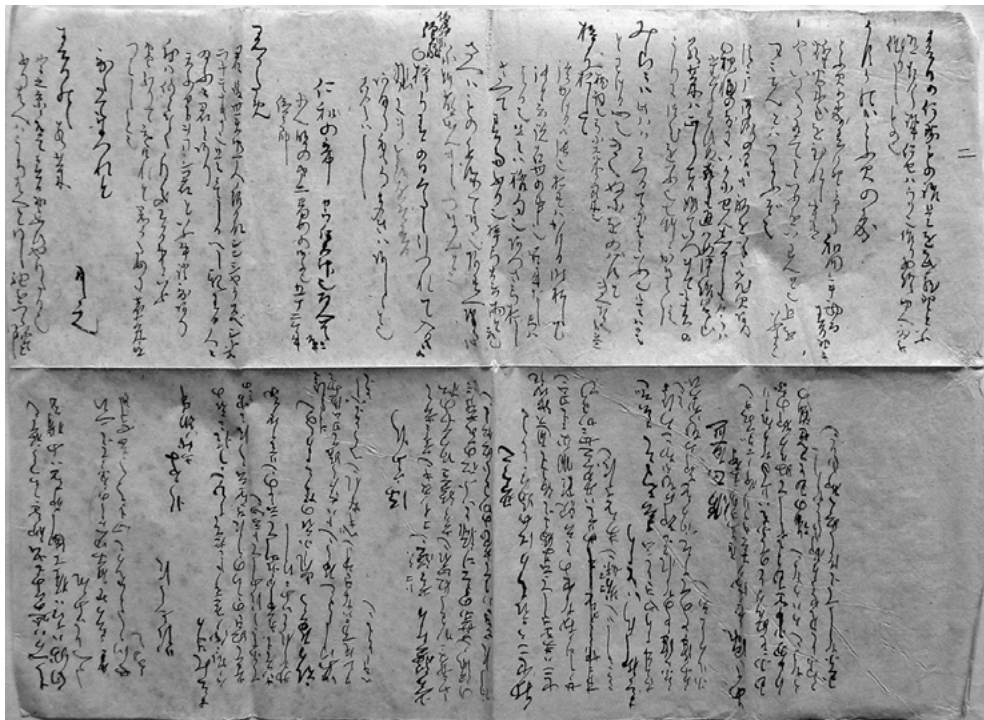
糸ハ縫ものなれとも、却而花がほころひたると也、／糸縫ものてこ  
そあるを、却而花ハほころび／にけると云也、

僧正遍昭

27  
あさ緑（いとよしかけてしらつゆをたまにもぬける春の柳か）  
色ノ浅ク青キナリ、柳ノマダ若キ也、

玉にもぬけるとのてにはハ上手なる故ナリ、／白露を玉にもなして  
ぬける柳の糸／かな也、かハかな也、誠の玉と見せ、誠の／糸と見  
せたる柳哉となり／玉になしてもつらぬく柳哉と也、

古今和歌集聞書1





[illegible]

